

西田・田辺・西谷の「論理」

西田哲学会

林晋

京大文、現代文化学系、情報・史料学専修教授

2015.07.26 京都工芸繊維大学

このPPTファイルは、<http://www.shayashi.jp> に掲示します

お詫びとお願い

- レジюмеは時間切れで推敲ができていません。すみません。修正したら <http://www.shayashi.jp> に掲示します。
- 発表内容は、今回頂けることを期待している意見・示唆・批判を元に修正・改良・洗練し、来年度中に論文する予定です。どうか、継続しての意見・示唆・批判をお願いします。
 - 連絡先：<http://www.shayashi.jp>にメールアドレスなどがあります。学会終了後の意見・示唆・批判は、そちらにお願いします。

発表の方法について

- 林は哲学者ではなく、歴史学(思想史、数学・科学史)、情報歴史社会学、デジタル・ヒューマニティーなどを専門とします。
- 哲学分野に多い、レジュメを読み上げるスタイルの発表はしません。
- レジュメは、文章的な意味でさえ不完全ですが、内容はかなりしっかり書いたつもりがあるので、発表では、主に、どうして、こんな一見不思議な『西田・田辺・西谷の「**論理**」』などという発想が生まれたか、そちらを主に話します。
 - 論理・論理学批判ならば、「空と即」などに大量にあるが、「西谷の論理」などというのは本来の意味ではあり得ない！だから、「...」がついて「論理」となっている。
 - 昨日、懇親会で話題がでたので一言：
 - 京大哲学の出口康夫教授が、回互的連関を数理論理学を使って解釈していますが、その方向の研究ではありません。むしろ、林の研究で、出口さんの西谷理解が如何に見当はずれなものであるかわかります(西洋哲学史を理解できていない?!)。
 - また、出口さんの西谷関係の諸論文は、記号論理学・数学からみても、初等的ミスや誤解に満ちています。ちなみに、林は、元数理論理学者です。

研究の背景と経緯（その1）

- 思想史、特に近代化に関連した思想史の研究を長年続けており、その一環として、田辺元哲学の史料ベースの研究を継続している。田辺を研究しようとした理由は、多分に「偶然的」
 - 理系研究者だった林の最初の史料ベース歴史学研究のポイントが偶然に田辺だった。（実は、そのころは田辺元と中村元を区別できていなかった。）
 - この研究に自信を得たことが大きく影響して、文系に転向を決意。幸運にも京大文に転職。転職後、田辺文庫の存在を知る。（田辺の霊に引き寄せられたような...）
 - パートナー八杉満利子の実家の別荘八杉山荘が、北軽沢大学村の田辺や野上弥栄子の別荘の近くで、八杉家と交流があった野上さんのことなど聞かされていた（ただし、八杉家と田辺家には交流なし）。文学部に転職後、田辺の山荘が近くにあることや、田辺が野上と老いらくの恋にあったことを知り、何か縁のようなものを感じる。
 - ドイツの数学者の手書き史料を研究するために、SMART-GSというツールを作ったが、史料を持っている機関に「日本人に分かるわけがない」という感じの対応を受けて、史料を中々自由に使わせてもらえない。自前の史料でやらないと駄目だなと感じ、「そうだ田辺文庫がある！」と思いたつ。
 - そして、田辺史料研究は、ほとんど手がついていなと知る。誰もやらないと聞くと、「では、やろう」と思ってしまう性分なので、田辺史料研究を始める。

研究の背景と経緯（その2）

- 哲学は、全くの素人だったので、素人の自分が、そちらをやってもダメだろうと考えた。日記が大量にあることを知っていたので、ドイツ近現代史での研究の際の経験から、政治的な記述が相当にあるはずだと考えた。そちらの方だと、完全な素人ではなかったし、少なくとも内容は哲学のように難しくないの理解できるから、「田辺史料の中に政治的な記述を探し出して、それを元に種の論理の思想史をやる」というプロジェクトを行うことした。
- 研究室の学生たちに、「来年度から京都学派をやる」と言って、(本当に！)のけぞられる。(のけぞった学生は、江戸期文化史(和算関係の文化史)をやっていた。いまは、Google Japan で働いている。)
- 要するに、最初は、まだ、読まれていない史料を、ドイツ文化史(数学史)の研究で培った方法論と SMART-GS を駆使して読めるようにし、家永三郎の田辺元思想史の後を継ぐつもりでいた。
- しかし、始めてみると目算は完全外れ、政治的な記述は、どの史料にも、殆ど無い！一方で、数理哲学に関係する史料に、種の論理の話が書かれている。非常に驚き、戦略を変更。レジュメの文献表の林の論文などで主張しているマールブルグ学派、H.Cohen の様な意味での「数理哲学」として田辺哲学を読み直すという、史料ベース思想史プロジェクトに変更。
- 研究は、始めたときの予想を遥かに超えて順調に進展。その後、レジュメに書いたような次第で、今回の発表のような、哲学か思想史かよくわからないようなことも始めて、現在にいたる。
- ということで、背景は、思想史(米国の意味での歴史学としての思想史)です。

今回途中経過を発表する研究の動機 その1

- 西谷は、田辺のCohen流「数理哲学」を、誰よりも理解していた。
 - レジューメの文献表の林の雑誌「思想」の論文などを参照。
- 田辺家と西谷家は大変親しかった。
 - 夫人たちが親友で、西谷の子供たちが田辺家の一室で遊ぶ、それを田辺が覗き込んで、「騒がしい」と叱りもせず黙って立ち去る。西谷がそう書き残している。
- では、どうして、西田・西谷は議論されるのに、田辺・西谷は議論されないのか？京大文、宗教学の杉村さんから、「どうして、西谷は、田辺の『数理哲学』の方向にいかなかったのか？」と問題提起される。
- でも、西谷は単に宗教哲学はわからないから、僕は止めておこう、と思っていたら...

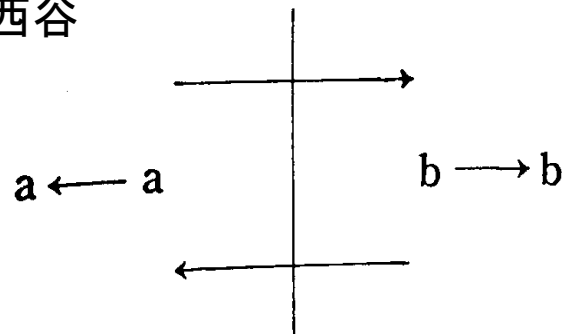
今回途中経過を発表する研究の動機 その2

- 人文学に転向した後の最大の研究ターゲットにしている「近代化研究」の文脈で、見つけた論理学者K.ゲーデルの「ニヒリズム論」から、ニヒリズム論の勉強を始め、秋富克哉さんの研究を通して、西谷のニヒリズム論に興味をもつ様になり、西谷を読み始める。
- そして、さらに、「空と即」における回互的連関の記述を読んで、田辺研究者として非常に驚いた。
- この記述には、レジюмеで詳述したように、副次的な位置づけではあるが、分有 teilhaben、切断などの種の論理の用語が使われており、しかも、「否定性がない」という決定的な違いはあるが、構造的には非常に似通っていた。
 - 田辺が種の論理の第一論文で、種の論理をLucien Lévy-Bruhlの原始社会論の分有 participation 概念から始めたことは有名だが、史料研究(講義準備メモと日記)から、これが、最初は、Max Scheler の知識社会学の Teilhabe 概念から来ていたことが分かっている。

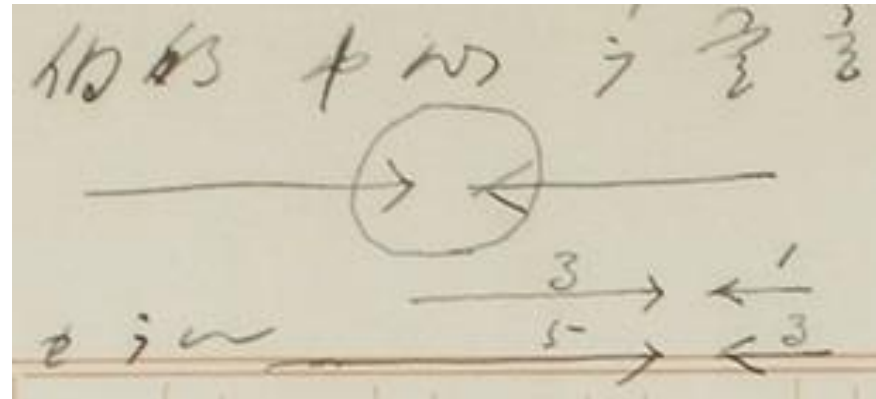
西谷の回互と田辺の切断

- さらに、レジュメに掲載した西谷が大谷大学講義で描いた(家庭内の人間関係としての)回互の図は、田辺の昭和9年特殊講義メモで見つけて、後の切断や種のテンソル的構造という、最も田辺らしい「数理哲学」の萌芽だろうと考えていた図と、西谷では否定性・対決性が外されている点以外では非常に似ていた。

西谷



田辺



対立をスルーする西谷、飽くまで対決したい田辺

- この二つの図は、田辺の図の方が、あまり重要なコンテキストとは思えないような所に出てきているということはあるが、両者の哲学の根本的性格の違いを、非常に上手くシンボライズしている。
- 晩年の田辺が「ハイデガー哲学との対決」を目指したように、田辺は、対決・否定を経ないものは「抽象的」(非現実的)として、認めようとしていない、対決・否定の哲学者だった。
 - 西田だけでなく、田辺をも、無で理解しようとする解釈があるが、田辺哲学の本質は飽くまで否定性。
- 一方、西谷は、禅僧めいたところが思想にまであらわれている。

平等の西谷と上下の田辺

- 回互的連関では、空の立場として、万物が壁がありつつも、それは透明な壁であり、あらゆる二者が、さらには、n者が、平等な位置で相互に参与 *mitteilen* している。
- これを西谷は、ニヒリズム論でも使われた、地上の目線を90度天空にまげて作られた「理想界」、プラトンのイデア界やキリスト教の神の世界へのアンチテーゼ、その90度を、もう一度回転しなおして横倒しにしたようなものとして記述している(レジュメ参照)。
- 一方、田辺では、類種個の上下構造が、最晩年まで決して崩れない。

西谷の家族と田辺の共栄圏

- この両者の思想の相違をシンボライズするのが、レジュメにも引用した西谷著作集24巻大谷大学講義第4講の「家族論のコンテキストでの回互的連関」。西谷は、彼らしく、家族内の心を開いた（ままにする）communication を論じ、どこにも家族内の対立などは語られず、親と子のオーダーの問題も語られない。
- 一方で、所謂、大島メモには「共栄圏の論理について」という田辺の短い講演の記録があり、PHP新書の「京都学派と日本海軍」に収録されている(pp.227-244)。これを見ると、田辺は大東亜共栄圏の中の日本の父権を意識したと思われる、家族の中でさえもオーダーがあるという議論をしている。
 - 参加者リストからすると西谷は欠席。

西田をどう比較する？

- 以上、話して来たように、田辺の種の論理における切断や類種個の上下構造と西谷の回互的相互浸透と空的平等は、見事な対比をなしている。この意味で、両者は円銀フィルムのポジとネガの様な関係で関係しているといえる。
- と、ここまでならば「論理」を持ち出すまでもない。先に見せた二つの図を使い、両者の違いを印象付けて「終わり」とできる。
- しかし、こういう研究を立ち上げようとした時に、それを藤田正勝さんに見せて意見を聞いたところ（林は哲学の知識が圧倒的に少なく、いつも自信がないので、専門家に良く聞きます。その際は、みなさまも、どうかよろしく。m(____)m)、「それならば、是非、西田の非連続の連続も比較するべきだ」という示唆を頂く。正直の所、非連続の連続は聞いたことがあるだけで、ちゃんと読んだことさえなかったのだが、藤田先生の示唆に従うと良い結果がでるといふのを、それまでの経験で知っていたので、従うことにした。

それが出て来たのが伝統論理学

- 非連続の連続のアイデアは、L.E.J.ブラウワーや田辺、シェーラーなどを読み込んでいた林にとっては、極自然なものに見えて、その点には問題なかったのだが、では、何をキータームにして、この三者をまとめるか、二者を選ぶと容易に対比できるのだが、三者を貫く何かのキーを見つけ、それにより三者を同時に比較したい...
- と、考えていたとき、他にやっている「論理学史」(米国の M. Friedman の有名な著作 **A Parting of the Ways: Carnap, Cassirer, and Heidegger** 歴史観を基礎に、伝統論理学から、ハイデガー的論理学批判と記号論理学への分岐の歴史として、現代論理学史を描く試み)で得ていた「境界線としての terminus」に注目する視点が、これに使えることに気が付く。

伝統論理学における単数項辞の「ある見方」

- 伝統的論理学は、term logic と呼ばれるように、term 中心の論理。Term は、ラテン語 terminus から来ていて、これは本来は柵とか仕切りとか、限界線とかいう意味。(ギリシャ語では horos で、同じ意味。)
- 近代的伝統論理学の最初とされる、ポール・ロワイヤル論理学などでは、この立場を堅持し、例えば、「ソクラテスは人である」という命題も、「ソクラテスという実体ひとつだけを境界線で囲んだ単数名辞 singular term」である「ソクラテス」と、「人」という一般名辞を繋辞で結んだものと理解されていると思われる。
- ポール・ロワイヤル論理学では、すくなくとも、「ソクラテスは人だ」のような単数項辞を主語とする判断を、判断の型 AEIO の A だとしている。

ソクラテスは仕切りに囲まれている

- これは名辞「ソクラテス」は、実体としてのソクラテスが、仕切り線・限界線 terminus で囲まれたものとして、理解される。
- これは、もちろん、「ソクラテスは人である」が、実は、「ソクラテスはすべて人である」となる気持ち悪さがある。しかし、これは無視。
- この terminus の一か所を切り開き、縦に伸ばすと西谷の回互の仕切り、限界線となる。
- これで西谷も「論理」に結びついた。
- こうすれば、三者は「論理」の言葉で比較できる。



では、西田は？

- では、こ？？の観点から西田はどうなるか？
- もちろん、一般車の限定、非連続の連続が、この観点に、直に関係することがわかる。
- 田辺は、「種の論理と世界図式」で、西田の絶対無を媒介とする限定は、否定性を含まず、本当の論理でないとした。
- もちろん、西田の限定は、伝統的意味での部分というような限定ではことは確か。
- しかし、西田は晩年、ブラウワーの直観と自身の思想の類似性を認めている。そして、林が明にしたように田辺の切断は、ブラウワーの不十分な否定性の認識から生まれた。
- 田辺の西田理解は正しいのか、間違いなのか？